

## [資料] 静岡県熱海市・伊東市での関東大震災の跡

— 災害教訓は生かされてきたか? —

名古屋大学減災連携研究センター\* 武村 雅之

### Report on the Field Survey for the Memorial Matters from the 1923 Great Kanto Earthquake at Atami and Ito Cities in Shizuoka Prefecture, Japan

Masayuki TAKEMURA

Disaster Mitigation Research Center, Nagoya Univ.

Furo-cho, Chikusa-ku, Nagoya 464-8601, Japan

Many memorial towers and monuments have been constructed for the heavy toll of life and for the restoration of villages or cities in Southern Kanto and Izu districts. Death claimed a toll of about 105,000 totally from the 1923 Great Kanto earthquake. These towers and monuments must be forever witnesses to the tragedy of the earthquake damage and spokesmen for the dying victims' wish "don't repeat such damages". However, most of them have been already forgotten by the citizens. We thought it's sacrilege and must use them for the public education of earthquake disaster prevention. This manuscript is a report on the field survey for the memorial matters from the Great Kanto earthquake at Atami and Ito Cities in Shizuoka Prefecture .

Keywords: Memorial Tower, Great Kanto Earthquake, Genroku Earthquake, Atami City, Ito City

#### §1. はじめに

筆者は、1923 年の大正関東地震による関東大震災の慰霊碑や記念物などを訪ねて、今後の地域防災活動に用いる資料としてまとめる活動を行っている。2010 年には地元“ひらつか防災まちづくりの会”のメンバーの協力を得て神奈川県平塚市中心部に残る関東大震災の慰霊碑や記念物などを調査し、資料としてまとめた[武村・篠原(2010)]。また、2011 年には、“はだの災害ボランティアネットワーク”のメンバーとともに神奈川県秦野市で調査し、同様の資料をまとめた[武村(2011)]。また、2012 年には現在の東京都 23 区内を対象にした著書を出版した[武村(2012)]。2013 年には神奈川県茅ヶ崎市・寒川町と横浜市を対象にした[武村(2013a, b)]。

本稿では、静岡県熱海市・伊東市を対象に調査した結果をまとめる。2010 年 9 月 29-30 日、2011 年 12 月 17 日、2012 年 9 月 29 日、2012 年 11 月 21

日の都合 4 回の現地調査を行った。調査に当っては羽鳥(1975)や小野・都司(2008)などの結果も参照した。羽鳥(1975)は房総から東伊豆にかけての元禄・大正関東地震津波の石碑や言い伝えを調べ、小野・都司(2008)は現地調査を通じて元禄地震津波の相模湾沿岸における津波の高さを評価している。本稿では主に大正関東地震を対象に、津波に限らずより網羅的に慰霊碑や記念碑や遺構を調査しまとめた。

#### §2. 熱海・伊東の被害

現在の熱海市は、当時の静岡県田方郡熱海町、多賀村、網代村からなる。また伊東市は同郡宇佐美村、伊東町、小室村、對島村からなる。

被害の状況をまとめると表1ようになる。この表は諸井・武村(2002, 2004)によるものである。諸井・武村は主に松沢(1925)と内務省社会局(1926)のデータをベースにした。このうち對島村は内務省社会局

\* 〒464-8641 名古屋市千種区不老町  
電子メール: takemura.masayuki@b.mbox.nagoya-u.ac.jp

表 1 当時の熱海・伊東地域の原因別被害[諸井・武村(2002, 2004)に元禄地震死者(石碑)を加筆]

Table 1 Summary of damages for old municipalities in Atami and Ito area.

町村	世帯数	被害世帯数		死者・不明数			元禄地震死者(石碑)
		全潰	流失	総数	全潰	流失	
熱海町	1508	181	163	92	15	77	
多賀村	546	71	11	4	4	0	
網代村	582	114	0	4	4	0	
宇佐美村	646	40	111	0	0	0	380余
伊東町	2437	283	361	109	22	87	163
小室村	559	4	56	7	0	7	200余
對島村	785			1	1		

(1926)に死者 1 名の記載があるのみである。『静岡県大正震災誌』[静岡県(1924)]にも被害の記載がないところから、他と比べて左程大きな被害が出なかったものと思われる。

熱海市、伊東市での被害の特徴は、強い揺れで多くの家屋が全潰したほかに、津波の被害が著しかったことを挙げることができる。静岡県(1924)はその様子を伊東町方面と熱海方面に分けて以下のように伝えている。

(伊東町方面)「前後二回連続して丈余の津浪は沿岸を襲ひ、伊東町玖須美の濱新道方面は殆ど其の全部を流失し、同町松原・湯川及宇佐美・小室の沿岸村落は何れも流失の厄に遭へり。」

(熱海方面)「初震より約十分にして前後二回津浪

の襲来あり、而も二丈の高さに及び、海濱の遭難せる者は再び山の手方面に逃れんとして、溺死を遂げたるもの少なからず。(中略)又伊豆山は山崩の為に埋没して其の七分を失ひ、多賀村・網代村も亦被害激甚を極めたること熱海・伊東に異なることなし。」

一丈は約 3m で、上記の記述通りだとすれば伊東では高さ 3m 余り、熱海では 6m ほどの津波だったことになる。同地方は、1703(元禄十六)年の元禄地震でも大きな津波被害を受けており、それについては小野・都司(2008)が詳しい現地調査をしているので、その報告を参考にできるだけ現地に赴いた。また、伊東市教育委員会(2005)は伊東市内の石造文化財の詳しい調査を行っており、関東大震災関連の石造物を探す上ばかりではなく、碑文を読む上でも参考にした。

### §3. 調査地点

調査範囲を図1に示す。熱海、宇佐美、伊東、川奈、八幡野周辺の 5 地域に分けて調査した。地点数は合計 20 地点になる。元禄地震に関するものがある地点は 5 地点である。表 1 に示す当時の町村のうち川奈は小室村、八幡野は對島村に属していた。

碑文はできるだけ正確を期してそのまま記載するように努めた。文中の/は改行位置を示す。長年の風雨などによる摩耗で肉眼で読めなかったものについては、後日伊東市教育委員会による拓本調査の結果も見せていただき正確を期した。そのようなケースについてはその都度記載する。



図1 調査地域

Fig.1 Map of the survey areas in Izu Peninsula.



図2 熱海地域

Fig.2 Atami area.



図3 国道135号線鳴沢の万霊塔

Fig.3 Memorial tower of Narusawa in Atami erected for the souls of victims due to landslide.

### 3-1 熱海地域 (図2)

#### (1) 国道135号線鳴沢(熱海市伊豆山)

JR 東海道線熱海駅北東約2kmで、国道135号線の伊豆山交差点からさらに真鶴方向へ400mほど進むと右側(海側)に鳴沢の万霊塔がある(図3)。正面が大きく剥落しており、一見何の碑か分からない。剥落部も残っているので、それらもつなぎ合わせて碑文を読むと以下のとおりである。

#### 万霊塔

(正面) 萬霊塔

(裏面上段)

大正十二年九月一日大震災惨死者

静岡縣道路工夫 小松富吉 / 全 中田平吉 / 全  
中田平蔵 / 輕便鐵道工夫 木村春吉 /

宝文工業職工 小林喜市 / 全 樋川房吉 / 全  
平川芳三郎

(裏面下段)

發起人並 / 寄附者芳名

金貳百圓 庵原郡 二又川森太郎 / 金壹百圓 東京  
寶文館 / 金五拾圓 別府 南辰造 / 金五拾圓 沼  
津 國分正吉 / 金五拾圓 當区 小松政吉 / 石工  
伊勢林造

伊豆山から門川(湯河原)にかけては県道と隣接する輕便鐵道(熱海軌道)ともに海中に滑落し数百尺の崖崩れを生じた[那波(1926)]。また、震災地応急測図原図[井上(2008)]にも、土砂崩れの印がつづき「通行するを得ず」との記載がある。土砂崩れによって犠牲となった道路ならびに鐵道工事関係者の慰靈

碑である。輕便鐵道は関東大震災の被害から復旧せず廢線となった。なお、現在の国道135号線は1953年以前は県道であった。

#### (2) JR 熱海駅前広場

廢線となった輕便鐵道を走っていた機關車が熱海駅の駅前広場に展示されている(図4)。説明板によれば、この機關車は熱海軌道の廢線後、各地の鐵道建設工事で活躍し、神戸市の国鉄鷹取工場内に展示されていたものを熱海市が払い下げをうけたものである。

武村(2009)によれば、熱海に別荘をもつ東京や横浜の実業家を中心となり、熱海の旅館も一部出資して1896(明治29)年に熱海と早川間に單線レールが開通した。豆相人車鐵道である。この鐵道はその名のとおり人が客車を押す形式の鐵道であった。当初は小田原馬車鐵道が通る小田原の早川口と早川の間0.5kmは徒歩で乗り換えを行っていたが1900(明治33)年の馬車鐵道の電氣鐵道化(小田原電氣鐵道)に合わせて早川口まで延長された。所要時間は5時間位であったといわれている。人車鐵道は1906(明治39)年に輕便鐵道へ切り替えるために軌道を広げる工事を行い、翌年より蒸氣機關車による運轉が始まった。

輕便鐵道の開通によって小田原・熱海間は2時間40分に短縮された。一方、将来の東海道線をにらんで工事が進められた熱海線は、国府津・小田原間が1920(大正9)年に開通、その際に小田原電氣鐵道の併走区間が廢止された。さらに小田原・



図4 熱海駅前にある地震で廢線となった輕便鐵道の機關車

Fig.4 A locomotive of the light railroad in the open space of Atami station.

真鶴間が 1922(大正 11)年に開通すると軽便鉄道の併走区間も廃止された。このような状況の中で 1923(大正 12)年 9 月の関東地震を迎えることになった。

### (3) 臨濟宗温泉寺(熱海市上宿町)

JR 伊東線来宮駅南東約 500m の熱海市役所近くにある。山門を入ると右手に本堂があり、その奥に玉をいただいた供養塔と塔記がある(図 5)。

#### 大震災万霊塔

(正面)

大震災／萬靈塔

大徳寺派管長 要宗 謹書

#### 塔記

(正面)

大震災萬靈塔記

噫大正十二年九月一日午時大震火災  
突如起天崩地裂加之海嘯並臻老幼男  
女進退茲谷號天哭地不知所左右實是  
空前絶後之慘害而悽愴之狀言筆亦能  
難盡從而人畜等死傷殆無量也矣生者  
亦僅以身免干各所耳矣回想其當時今  
尚感慨有難禁者於茲乎陰記之諸氏相  
胥建立萬靈塔於温泉寺境内致誠叙哀  
為長以追念供養之表成矣

大正十三年九月一日

熱海温泉精舎現住

鷲嶺瑚山 謹撰



図 5 温泉寺にある万霊塔と塔記

Fig.5 Memorial tower of Onsen-ji Temple in Atami erected for the soul of victims.

(裏面)

「發起人」として 熱海新報社主, 温泉寺, 醫王寺, 興禅寺, 海蔵寺, 大乘寺, 快長院の各住職, 誓欣院, 日本工業會社の 9 人の氏名

「叢起人」として 6 人の氏名

「世話人」として 9 人の氏名

薦職 天野福次郎／石工 伊勢

發起人となっている寺院のうち, 興禅寺, 海蔵寺, 大乘寺は温泉寺と同じ臨濟宗で, 海蔵寺は現在の沼津市, 他は静岡市の寺院である。醫王寺と快長院は真言宗で, 醫王寺は磐田市, 快長院は地元熱海市の寺院である。また誓欣院は浄土宗で温泉寺と同じく熱海市上宿町の寺院である。震災犠牲者の一周忌に, 地元熱海を中心に静岡県各地の寺院などが協力して建立した慰霊碑である。



図 6 宇佐美地域

Fig.6 Usami area.

### 3-2 宇佐美地域(図 6)

#### (1) 日蓮宗行蓮寺(伊東市宇佐美)

JR 伊東線宇佐美駅の北東約 700m にある。

#### 関東大震災つなみ浸水地点の標識

境内に続く石段の上から 2-3 段目の左側に「大正 12 年／関東大震災／つなみ浸水地点」と書かれた標識がある(図 7)。

境内には元禄地震の 60 回忌に当る 1762(宝暦十二)年に建てられた万霊塔がある。碑文は付録に示す。伊東市教育委員会(2005)によれば要旨は以下のようである。

元禄十六年十二月二十三日深夜，東国に大地震が起こって，寢床を揺るがした。起きようとして転び，立とうとして倒れ，誰しも皆天地が滅却したと感じた。地震が収まり我にかえって，皆三々五々集まって来た。村の古老の言うには，寛永十年正月の大地震の時には，河川や井戸の水が涸れ，海は潮が五～六町（一町は約一〇九メートル）沖まで引き，魚がたくさん砂上に取り残された。元気のよい男どもが，この魚を取って陸に帰った後で，漸くにして津浪がやってきた。家屋は流出したが，溺死者は二，三人を数えるに止まった。あれから数えて七十一年，今回も同様であろうかと隣近所で話し合っていたが，河の水が涸れることもなく，海の潮も全く退かず，津波が突然襲ってきた。あつという間の出来事で逃げ遅れ，溺死者は大凡三百八十余人に達した。まさにこの世の終わりのようであった。一体これは前世からの約束ごとであろうか。元禄の大津浪から六十年たった今，再び災禍にかかることのないよう願わずにはいられない。

寛永十年正月の地震とは，1633年の寛永小田原地震で，静岡県(1996)によれば，熱海では浜宿という猟師町が流されたという。



図7 行蓮寺の階段にある津波浸水地点の標識  
Fig.7 A mark of tsunami flooding at stone steps of Gyoren-ji Temple in Usami.

## (2) 城宿会館(伊東市宇佐美)

JR 伊東線宇佐美駅の東約 300m にある。  
関東大震災つなみ浸水地点の標識

図8の車の奥の建物が城宿会館で，手前の電柱の際に津波の標識がある。標識には以下のように書かれている。

(上面)

大正12年／関東大震災／つなみ浸水地点  
(左上側面)

昭和六十二年三月／伊東市

このあたり一帯は城宿と呼ばれ，元禄地震前は浄土宗浄信寺の境内地であった。現在，浄信寺は城宿から約600m北方の高台にある。現住職の話では城宿会館の土地は現在でも浄信寺の宅地であるという。

先代26世隆誠上人がまとめた「回向山起行院浄信寺略史」[浄信寺(2007)]によれば，元禄地震の大津波で堂宇一切流失した。その際過去帳，古文書なども流失した。寺が現在地に移転を果たしたのは1725(享保十)年のことである。海岸部に多い檀家も津波で大きな被害を受け，再建に時間がかかったものと思われる。現在の本堂は再建時のもので，旧寺地由来のものは境内に残る元禄の年号が刻まれた石仏が3体のみである。『郷土宇佐美誌』[大高(1969)]には，元禄地震の津波によって宇佐美で550人の死者があったとする浄信寺の寺伝があるとされ，小野・都司(2008)も同様の指摘をしているが，それを裏付ける書類は見つかっていないという[浄信寺(2007)]。また，城宿会館の西側，宇佐美小学校との間に会館の土地から一段高くなったテニスコートがあり，「横枕」という地名が残っている。小野・都司(2008)はこのあたりを「横枕」と呼ぶのは，津波に追いつかれた男女が横枕に倒れたことを表しているとしている。地名の由来については静岡県(1996)でも言及されているが，「浄信寺略史」では触れられていない。ただし，城宿の旧境内地と思しき場所からは今でも遺骨が出



図8 城宿会館の近くにある津波浸水地点の標識  
Fig.8 A mark of tsunami flooding near Jyoshuku hall in Usami.

てくることがあると書かれており、寺の移転が津波という不慮の事象によって引き起こされたことを物語っているようである。

いずれにしても、関東大震災のつなみ浸水地点の標識のある現在の城宿会館付近が、元禄地震では寺が流失するほどの津波の高さであったことを考えると、小野・都司(2008)が指摘するように、同地点での津波は、元禄地震の方が高かったと推察するのが自然である。



図9 春日神社にある津波浸水地点の標識

Fig.9 A mark of tsunami flooding at Kasuga Shrine in Usami.

### (3) 春日神社(伊東市宇佐美)

JR伊東線宇佐美駅南南東約400mにある。鳥居を潜り境内に入ると正面に本殿があり、境内左側の木が茂る草むらに津波浸水地点の標識がある(図9)。標識は設置時期を除くと城宿会館のものとはほぼ同じ形式のものである。

#### 関東大震災つなみ浸水地点の標識

(上面)

大正12年/関東大震災/つなみ浸水地点  
(右上側面)

昭和六十一年二月/伊東市

### (4) 峰熊野神社(伊東市宇佐美)

JR伊東線宇佐美駅西約600mにある。急な階段を登り鳥居を潜ると狭い境内地があり、さらにそこから10段余りの階段を登ると本殿がある。階段の下には左右一対の狛犬が立っている。

#### 石灯籠

本殿前に一対の石灯籠があり、右側の灯籠には以下のように刻まれている(図10)。

(竿正面) 奉燈

(竿左側面)

後世ニ之ヲノコス

大正十二年九月一日大ジシ

ツナミ十月廿日マデヨル/宮内老人

(竿裏面)

大正十二年/七月十四日建設/峰 宮内久吉

裏面の建立時期より震災直前に建立された灯籠であることが分かる。左面の記載は震災後の追刻とみられる。胴体に折れた跡があり、地震でこわれ修復した際に追刻されたようである。一方、左側の灯籠には竿正面に「納燈」と書かれ、裏面は右側と同じであり、損傷のあとは見られない。



図10 峰熊野神社の灯籠に刻まれた地震の記録

Fig.10 A dedicatory lantern at Mine-Kumano Shrine in Usami.

境内にはこの他、社殿に向かって右側の狛犬の前に以下のような手水鉢がある。

#### 手水鉢

(正面)

納奉

(右側面)

大正十二年十二月造之

寄附者 峰

稲葉王五郎 妻/さく

稲葉彦五郎 妻/きく

震災との関連は定かではないが、2人の婦人が震災直後に奉納していることから、震災の犠牲者に対する供養の意味があるものかもしれない。



図 11 伊東地域  
Fig.11 Ito area.

### 3-3 伊東地域 (図 11)

#### (1) 葛見神社 (伊東市馬場町 1 丁目)

JR 伊東線伊東駅南南東約 1.3km にある。伊東大川 (松川) に架かる岡橋を渡り真っ直ぐ東に突き当たったところに神社がある。神社の由緒にもあるように、境内には大楠があり、元首相の若槻礼次郎が建てた老楠を讃える碑もある。本殿右わきの手水舎に震災の記録が刻まれている (図 12)

#### 手水舎

(左側の石柱)  
心 (正面最上部)  
此柱ハ大正十二年九月



図 12 葛見神社の手水舎

Fig.12 A dedicatory washstand at Kuzumi Shrine in Ito.

一日大震災ノ時破壊  
シタル鳥居ノ柱ヲ記念  
ノタメ其儘使用ス (内側面)  
(右側の柱)  
洗(最上部, 右と合わせて「洗心」)  
昭和三年十月十九日  
建設ノ相州吉濱ノ佐藤隆吉 (内側面)

手水舎が震災によって壊れた鳥居の残骸で造られたことが分る。左側の石柱の裏に木札がかかり、「昭和五十五年九月改修」とある。

#### (2) 日蓮宗仏現寺 (伊東市物見ヶ丘)

JR 伊東線伊東駅南東約 1.4km の伊東市役所に隣接する寺院である。県道 110 号線の角屋酒店 (稲葉邸) から真っ直ぐに南方向に入ると次第に坂道となり、南妙法蓮華経と刻まれた大きな石碑がある。その脇の階段を上ってゆくと仁王門に到着する。仁王門を入ると右側に慰霊碑が集められた場所がある (図 13)。図のように 2 つの五輪塔と 3 つの石碑と 1 つの石灯笼が建っている。(a)(b)は関東大震災、(c)(d)は元禄地震による犠牲者の慰霊碑である。一番右側の五輪塔は元和、灯笼は天明の造立で震災とは無関係のようである。

#### 万霊塔 (写真 a)

(正面)

大正十二年九月一日午前十一時五十八分関東大地震アリ被害神奈川縣ヲ中心トシテ周囲六縣下ニ及ヘリ就中京濱ノ被害甚大ニシテノ家屋大半焼亡シ燻死者十餘万ヲ出シ財貨ノ損失百億ヲ超コトイフ其外建物ノ倒潰道路橋梁ノ破壊等被害勝テ數フヘカラス當時ノ我カ伊東町ハ大津浪ニ襲ハレテ民家多数流失シ歿死者八十四名ヲ出セリ此外他處ニ於テ惨死セルモノ負傷後数日ニシテ死セルモノヲ加フレバ其数實ニ壹百ノ五名凄惨悲痛之ヲ語ルニ忍ヒス及チ一周忌追弔法會ニ際シ報地莊嚴ニ擬センカタメ緇素十数名托鉢修行ヲ為シテ浄財ヲ集メ寶塔壹基ヲ造立シ元ノ禄十六年ノ大地震罹災歿死者ノ供養塔ト共ニ之ヲ此處ニ安置シタリ願クハ長ク此ノ犠牲者ノ冥福ヲ祈リ併セテ今日以後斯ル災害ノ復ヒ無キ事ヲ禱リノ且ツ此ノ大天災ヲ忘レス日常不時ノ災變ニ處スルコトヲ念トシ自他ノ利益ヲ廻ラシメ法界萬靈廻向セラレンコトヲ南妙法蓮華経

(左側面)

大正十三年八月建之

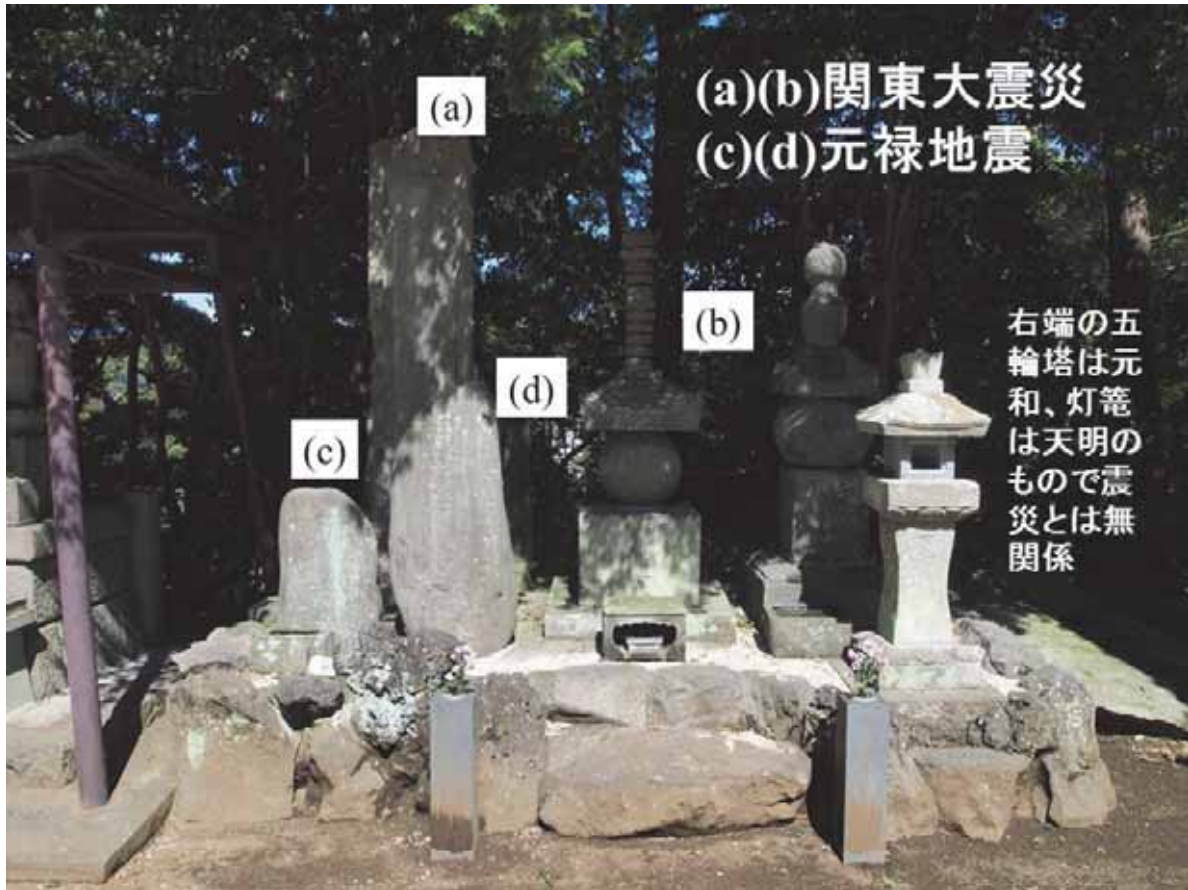


図 13 仏現寺の仁王門横にある関東大震災と元禄地震の慰霊碑群

Fig.13 Memorial towers near Nio-Gate of Butsugen-ji Temple in Ito erected for the souls of victims due to the 1923 Great Kanto Earthquake and the 1703 Genroku Earthquake.

(右側面)

九月一日ヲ忘レルナ

質實剛健ノ大詔ヲ守リテ常ニ最善ノ事ニ従ヒ以テ犠牲者ノ靈ヲ慰ムヘシノ此日酒煙ヲ禁シ女ハ特ニ紅粉ヲ廢シテ常ニ去萃就實ノ聖旨奉體ニ努ムヘシノ大地震ノ際ハ火ノ元用心第一ニ老幼相扶ケテ安全ナル高地ニ避難スヘシ

一周忌を前に建てられたもので、当時の伊東町では津波で多くの民家が流失して 84 名の死者を出し、さらに他所での死者やしばらく経ってからの死者を加えると 105 名の犠牲者が出たと書かれている。また「九月一日ヲ忘レルナ」の言葉とそれ以下の文章には、二度とこのような被害を出すまいという人々の決意と願いが感じられる。

#### 五輪塔(写真 b)

五輪塔は、下から方形＝地輪、円形＝水輪、三角形＝火輪、半月形＝風輪、宝珠形＝空輪の五輪からなり、水輪、地輪に以下のような記載がある。

(正面)

南無妙法蓮華經(水輪)

大震災歿死者供養塔(地輪)

(右側面)

願以此功德普及於一切(水輪)

托鉢修業参加人名

發起 佛現寺 日仁

随喜 妙法寺 日厚

同 佛光寺 日透

同 妙彌 泰清

同 沙彌 義修

(以下参加信徒 7 人の名前)(地輪)

(左側面)

我等與衆生皆俱成佛道(水輪)

(信徒 14 人の名前)(地輪)

(裏面)

大正十三年九月一日建立之(水輪)

大正十二年九月一日午ノ前十一時五十八分関東ノ大地震アリ京濱大半焼ノ失燔死十餘万我伊東町



亦不幸大海嘯ニ襲ハレ／歿死者八十四名ヲ出セリ  
及チ一周忌追弔法會／虔修ノ砌托鉢修行シ淨財ヲ集メテ此ノ寶塔ヲ／造立シ以テ各精靈ノ報地莊嚴ニ擬スルモノ也（地輪）

仏現寺や妙法寺、仏光寺などの僧侶並びに信徒が一周忌追弔法会のために托鉢し浄財を集めて建立した五輪塔である。裏面地輪の内容は先に説明した万霊塔とほぼ同じ内容でここにも死者 84 名と書かれている。解説に当たっては、伊東市教育委員会から拓本資料を提供いただき参考にした。特に五輪塔の地輪の裏面は肉眼で判別できない部分が多い。

元禄地震に関する 2 つの石碑のうち、大きい方(d)は、元は玖須美海岸(和田の山へい旅館付近)に建っていたものと言われている[静岡県(1996)]。この他に、仁王門から入って正面にある常経堂の裏の毘沙門堂の前に、「日蓮大菩薩」と書かれた五輪塔がある。碑文には名主家の当主が小田原に公用に出かけている最中に元禄地震による火事で亡くなったことが書かれている。これら 3 つについては付録に碑文を記載する。



図 14 角屋酒店に保存されている大川橋の欄干  
Fig.14 A part of the Okawa-bridge destroyed by the tsunami preserved in Kadoya-store of Ito.

### (3) 角屋(稲葉邸)(伊東市和田2丁目)

JR 伊東線伊東駅南東約 1.2km にある。「伊東市史だより」第 8 号[伊東市教育委員会(2007)]によれば、関東大震災の際の津波が伊東大川を遡上し、現在の国道 135 号線に架かる大川橋の欄干が折れた。その欄干が角屋酒店に保存されている(図 14)。

角屋酒店の店主の話では、店主の曾祖父の時だった。関東大震災の前年に家を新築したが地震で全潰した。再建の時、ねじれた柱を記念に用いて再建したという話を聞いている。そのような人だったので大川の橋の欄干も記念にもってきたのではないかとのことである。

### (4) 游心楼山へい(伊東市和田1丁目)

JR 伊東線伊東駅南東約 1km にある。伊東市教育委員会(2007)によれば、和田浜にあった 10 本松が関東大震災の津波で流され残った一本が旧「山へい」旅館の敷地に残っている(図 15)。現在も東伊豆道路に面する旅館の脇を入ったところに 1 本残っているのを確認することができる。旅館「山へい」は先の稲葉邸の分家筋であったが、8 年前に旅館の経営が変わり、10 本松の説明文など旧山へい旅館にあった関係資料の行方は不明である。



図 15 游心楼山へいに残る津波に耐えた松  
Fig.15 A pine tree survived from the tsunami of the Kanto earthquake in Yamahei-Hotel of Ito.

### (5) 関東大震災つなみ浸水地点の標識

伊東市教育委員会(2005)によれば、伊東の市街地には 3 か所に津波浸水地点の標識があるはずである。このうち玖須見の法船寺(伊東市芝町)付近にあるはずの標識は発見できなかった(論文末尾の追記参照)。石灯笼バス停脇にあるものと、仏光寺前の小道を北西に入った左側の玖須見市立児童館前(伊東市和田1丁目)にあるものは確認することができた(図 16, 17)。ともに同じ標識で、以下のように記されている。



図 16 石灯籠バス亭横にある津波浸水地点の標識  
Fig.16 A mark of tsunami flooding at Ishidoro bus stop in Ito.



図 17 玖須見児童館前にある津波浸水地点の標識  
Fig.17 A mark of tsunami flooding at Kuzumi Child Hall in Ito.

(正面)大正十二年関東大震災／つなみ浸水点  
(上面)つなみ浸水点  
(左面)昭和六十二年十一月／伊東市

関東大震災による津波では県道 110 号線付近まで浸水し、国道 135 号線の大川橋付近では欄干に船がぶつかったことからさらに上流部まで浸水したようである。詳しい浸水域は伊東市教育委員会(2007)に記載されている。

一方、元禄地震の津波の高さや浸水域については、小野・都司(2008)が鎌田地区で調査し、競輪場のやや下流にある「船のほら」「櫓ヶ淵」が元禄地震の津波の侵入にまつわる地名であるという文献を紹介し

ている。伊東市教育委員会(2005)でも同様の指摘をし、さらに「船のほら」の対岸に塚田という場所があり、そこに津波地蔵と呼ばれる石塔があったといわれているが、石塔も津波に関する墓石も鎌田には見つからないとしている。この津波地蔵については、静岡県(1996)が在りし日の写真を掲載し、そもそも塚田という地名は元禄地震の津波で流れ着いた多数の溺死者を埋葬した場所であると指摘し、現在、津波地蔵の所在は不明であるとしている。

これに対して小野・都司(2008)は、同地区の JA 静岡燃料サービスのガソリンスタンドの敷地にある真新しい供養塔が津波地蔵の跡に建てられたものであらうと指摘している。伊東市教育委員会(2005)でもこの供養塔を巻末の「石造物一覧表」に掲載しているが建立年などは書かれていない。石碑には確かに、正面に「元禄十六年大津波 祈震災犠牲者の冥福」とあり、裏面に「あいら伊豆農業協同組合」と書かれている。

鎌田地区の南伊東駅周辺は、図 11 にある岡橋よりさらに 1km 以上上流に位置し、元禄地震の津波がそこまで遡上したとすれば、関東大震災の津波に比べてかなり大きな規模であったと推定される。



図 18 川奈地域  
Fig.18 Kawana area.

### 3-4 川奈地域(図 18)

#### (1) 曹洞宗海蔵寺(伊東市川奈)

伊豆急線川奈駅から川奈港の方向へ坂を下り東へ約 600m の所にある。本堂に通じる石段の下から 7 段目付近の右側に関東大震災による津波浸水点の標識がある(図 19)。

#### 関東大震災つなみ浸水地点の標識

(正面)大正十二年関東大震災／つなみ浸水点

(上面) つなみ浸水点  
 (左面) 昭和六十二年十一月 / 伊東市



図 19 海蔵寺の階段にある津波浸水地点の標識  
 Fig.19 A mark of tsunami flooding at stone steps of Kaizo-ji Temple in Kawana.

先に示した伊東市街地にあった2地点(石灯籠バス停前および玖須見児童館前)のものと同じである。石段は全部で22段あり、静岡県(1996)によれば、元禄地震では上から数えて3段目まで浸水したとの寺伝があり、元禄地震の津波の方がより高かったことが分る。

## (2) 川奈漁港上(伊東市川奈)

海蔵寺と全く同じ形式の津波浸水地点の標識が漁港上の上原商店を通り過ぎたところにある。



図 20 八幡野周辺地域  
 Fig.20 Yahatano area.

静岡県(1996)によれば、川奈地区でも元禄地震に関する供養碑が曹洞宗恵境院にある。元は港近くの川奈集落に林光院という寺院があり、その大門にあったものが、1918(大正5)年に林光院が廃寺となって恵境院と合併し、現在の高台の境内地へと移動した。供養碑もその際に移転したという。碑文は付録に掲載する。



図 21 蓮着寺前にある津波浸水地点の標識  
 Fig.21 A mark of tsunami flooding in front of Renchaku-ji Temple at Futo.

## 3-5 八幡野周辺地域(図 20)

### (1) 関東大震災つなみ浸水地点の標識

伊豆急線伊豆高原駅東約2.5kmの蓮着寺前(伊東市富戸)と南西約1.1kmの八幡野港前(伊東市八幡野)に津波浸水地点の標識がある。いずれも海岸からそれほど離れたところではなく、「地震/津波」の看板も含めて両者は同じ形式の標識である(図21)。石碑には以下のように記されている。

(正面) 大正十二年関東大震災/つなみ浸水点  
 (上面) つなみ浸水点  
 (左面) 昭和六十三年七月 / 伊東市

### (2) 曹洞宗大江院墓地(伊東市八幡野)

伊豆急線伊豆高原駅西約1kmに大江院があり、その裏山の墓地に慰霊碑がある(図22)。

#### 関東震災歿死者墓

(正面)  
 関東震災歿死者墓  
 (裏面)

大正十二年九月一日大震災遭難死者

六体漂着八幡野海岸因埋葬上瀬戸  
墓地而哀愍靈魂莊嚴報土者也

大正十三年八月三十一日

八幡野區有志者建之



図 22 大江院墓地にある漂流遺体の墓

Fig.22 Memorial tower of Oe-in Temple in Yahatano erected for the soul of drifting victims.

住職によれば、碑文中の瀬戸は海岸に近い場所である。供養碑は最初から今の高台にあったということである。墓地は今ほど開発されていなかったが、最初から犠牲者を想い海の見える高台に建てたのだらうとのことである。熱海や伊東などにおいて死亡し津波で漂流してきた遺体に対するもので、對島村の被害は他と比べて大きくなかったとは言え、当時の人々の優しさを感じる慰霊碑である。



図 23 青月院墓地にある漂流遺体の墓

Fig.23 Memorial tower of Seigetsu-in Temple at Akazawa erected for the soul of drifting victims.

### (3) 曹洞宗清月院墓地(伊東市赤沢)

伊豆急線伊豆高原駅南西約 3.2km に清月院があり、その墓地の中腹に慰霊碑がある(図 23)。

#### 関東大震災漂着死体之墓

(正面)

関東震災漂着死体之墓

(裏面)

大正十二年九月一日震災

當赤沢区

梅原正次郎建之

大江院の碑と同様、漂着遺体の慰霊に建てられたものである。清月院は現在無住で、伊豆大川の龍豊院が管理している。城ヶ崎文化資料館の高橋一之氏から、赤沢の古老の話として、震災の時には伊東方面から箆笥やスイカや仏壇が流れてきた。津波で赤沢の沖の平島の根まで見えたという話を聞いた。

#### §4. おわりに

今回調査した地域は関東大震災の約 220 年前にも元禄地震によって大きな津波災害を被っている。表 1 には、宇佐美の行蓮寺、伊東の仏現寺、川奈の惠鏡院の石碑に刻まれた死者数を対応する町村の欄に加えた。何れも現在の伊東市域である。先に何度か述べたように伊東市では、元禄地震の津波の高さは、関東大震災の津波に比べ総じて高かったようである。また発生時刻が冬の真夜中ということで、高台への避難も容易ではなかったものと思われる。これらが元禄地震で多くの死者を出した要因だったと思われる。

一方、それから 200 年以上が経過した関東大震災の津波に際して、その経験が如何に生きたかは興味深い問題である。表 1 から分るように関東大震災の際に宇佐美では、人々が地震の強い揺れと同時に一早く避難して一人の犠牲者を出すこともなかった。素早い避難行動は、地震直後に宇佐美尋常小学校と同高等小学校の全校児童によって書かれた作文からもよく分る[市立伊東図書館(1994)]。このことから元禄地震の経験が何らかの形で宇佐美村の人々に浸透していた可能性がある。もし仮にそうであれば、当時の人々が後世に教訓を伝えるために建てた行蓮寺の万霊塔もその役割を果たして来たことになる。

ところが、一方で静岡県(1996)によれば、最近行蓮寺の万霊塔のことは地元でも限られた人しか知らないという。供養塔を建てたからといって、当時の人々の思いが後世に伝わるかというそう簡単なもの

ではないようである。そのことは、隣の伊東町で元禄地震の教訓を伝える供養塔があったにも関わらず関東大震災でも多くの犠牲者が出たことを見ればよく分る。

そもそも供養塔が発する教訓は建てられた場所でその役割を最大限に発揮するが、川奈の恵鏡院の万霊塔や仏現寺の供養塔のように様々な事情で移転を余儀なくされる場合がある。また鎌田の津波地蔵のように、何時知れずに所在不明になってしまうものもある。また、言い伝えについてはさらにその危険性は高いかもしれない。例えば、川奈の海蔵寺の石段に残る元禄地震の言い伝えは、先代住職までは伝わっていたが、筆者が訪れた際、すでに現在の住職はご存じではなかった。

近年伊東市は、本稿でもいくつか紹介したように、関東大震災のつなみ浸水点の標識を市内各地に設置して人々の津波に関する注意喚起を行っている。大変結構なことだと思う。しかしながら伊東市役所の防災担当者は2010年に筆者が確認したところでは、仏現寺にある元禄地震や関東大震災の供養塔の存在すら知らなかった。またせっかく建てられた関東大震災のつなみ浸水点の標識も観光との兼ね合いだろうか、市街地では元々目立たないよう建てられている上に、環境の変化によって増々所在が分り難くなっているように見える。

仏現寺の供養塔では毎年、玖須美地区の町内会が集まり仏現寺とともに追善供養が行われている。このことは卒塔婆に関東大震災、元禄地震、安政年間の地震(安政東海地震か?)と書かれていることから分る。できればさらに範囲を広げて市役所の防災担当者や学校関係者、さらに子供たちも参加して犠牲者を供養し防災を誓いあう集いを実施するくらいのはあってもよいかもしれない。そのような時には、八幡野や赤沢にある漂流遺体に対する慰霊碑のように、当時の人々が優しい気持ちをもって被災者に接していたことも同時に伝えて欲しいものである。命を落とすような大きな被害を受けないように日頃から備えることはもちろんであるが、復興の際にはお互い助け合う優しい気持ちが不可欠だからである。

本稿で副題にした“災害教訓は生かされてきたか?”という問いに対し、将来の地震に際して“生かされてきた”と言えるためにはなお一層の努力が必要であるということ強く感じる次第である。

## 謝辞

本調査にあたっては、伊東市教育委員会の金子浩之氏に関連資料の提供などしていただいた。また、浄信寺住職山口昌廣氏には同寺の歴史に関する資料提供をいただいた。また現地調査にあたっては伊豆半島ジオパーク事務局の鈴木雄介氏ならびに“ひらつか防災まちづくりの会”のメンバーの協力を得た。現地調査の過程でお世話になった多くの地元の方々も含め皆様に心より感謝いたします。

対象地震：1923年大正関東地震

## 文献

- 井上公夫, 2008, 第 I 部, 第 3 章 震災地応急測図原図と土砂災害, 第 II 部, 震災地応急測図原図と土砂災害, 『地図にみる関東大震災』図録(歴史地震研究会編), 日本地図センター, 18-39, 50-61.
- 羽鳥徳太郎, 1975, 元禄・大正関東地震津波の各地の石碑・言い伝え, 東大地震研究所彙報, 50, 385-395.
- 伊東市教育委員会, 2005, 伊東市の石造文化財, 伊東市史調査報告第二集, pp.369.
- 伊東市教育委員会, 2007, 伊東市史だより第 8 集, 8pp.
- 浄信寺, 2007, 回向山起行院浄信寺略史(第 1~5 回), 宇佐美の歴史を語る会会報「さりはま」80-84 号.
- 松沢武雄, 1925, 木造建築物に依る震害分布調査報告, 震災予防調査会報告第 100 号甲, 163-260.
- 諸井孝文・武村雅之, 2002, 関東地震(1923年9月1日)による木造住家被害データの整理と震度分布の推定, 日本地震工学会論文集, 2(第3号), 35-71.
- 諸井孝文・武村雅之, 2004, 関東地震(1923年9月1日)による被害要因別死者数の推定, 日本地震工学会論文集, 4, 4, 21-45.
- 内務省社会局, 1926, 大正震災志(上巻), 1236pp.
- 那波光雄, 1926, 国有鉄道震害調査報告, 震災予防調査会報告第 100 号丁, 145-214.
- 小野友也・都司嘉宣, 2008, 元禄地震(1703)における相模湾沿岸での津波高さ, 歴史地震, 23, 191-200.
- 大高吟之助, 1969, 郷土宇佐美誌, 210pp.

市立伊東図書館,1994,こわかった地震津波:関東大震災を体験した宇佐美小学校全児童の作文集,pp.210.

静岡県, 1924, 静岡県大正震災誌, 478pp.

静岡県,1996,静岡県史別編 2 自然災害編,808pp.

武村雅之, 2009, 未曾有の大災害と地震学—関東大震災, 古今書院, 209pp.

武村雅之, 2011, 神奈川県秦野市での関東大震災の跡—さまざまな被害の記憶, 歴史地震, 26, 1-14.

武村雅之, 2012, 関東大震災を歩く—現代に生きる災害の記憶, 吉川弘文館, 328pp.

武村雅之, 2013a, 神奈川県茅ヶ崎市・寒川町での関東大震災の跡—相模川東岸地域の被害と復興, 歴史地震, 28, 1-17.

武村雅之, 2013b, 横浜市における関東大震災の慰霊碑・記念碑・遺構, 横浜都市発展記念館紀要, No. 9 (投稿中)

武村雅之・篠原憲一, 2010, 神奈川県平塚市での関東大震災の跡—慰霊碑巡礼の記録, 歴史地震, 25, 91-100.

## (追記)

論文提出後の2013年12月末に, 伊東市玖須美財産区議会書記の篠原憲氏から本稿で発見できなかった伊東市芝町の法船寺近くのつなみ浸水地点の標識は今もあるという知らせをいただいた。篠原憲氏からの写真によれば, 法船寺近くに神辺沢稲荷という神社があり, 小さな鳥居脇の植え込みにすっぽり隠れるように標柱が立っている(小さな神社で詳細な場所は確認できていない)。形状は図16や17と同じであるが左側面の建立年は「昭和六十三年七月/伊東市」となっている。

さらに篠原憲氏によれば, 伊東市銀座元町のホテル暖香園附近の路上にもつなみ浸水地点の標識があるとのことであった。これは伊東市教育委員会(2005)にも掲載されておらず本稿での調査対象からも漏れているものである。幸い Google マップのストリートビューで見つけることができた。場所は図11の地図で大川橋のひとつ上流側に架かるいで湯橋から南へ200mほどのところである。手前にファミリーレストランのジョナサンがあり, それを過ぎたところの街路樹の植え込みにほぼすっぽりと隠れるように建っている。篠原憲氏からの写真によれば, 形状は図16や17と同じで記載事項もまったく同じで, 建立年は昭和62年11月である。

## 付録 元禄地震の慰霊碑碑文

### (1) 行蓮寺 (宇佐美)

#### 万霊塔

(正面)

南無妙法蓮華經 法界

(右側面)

宝曆十二壬午年天十一月二十三日建立之

津波流死之諸聖靈第六十年忌

(左側面)

施元山行蓮寺

願主 題目講中／現住日全

(裏面)

元禄十六年未年十一月廿二日夜半東國大地震動寢席欲起傳欲立倒人皆思惟天地滅却／震止後心地如甦村老相集謂伝聞寛永十癸酉年正月十九日大地震之時河井水乾海／面潮退五六町魚在沙上數多也壯父走取之婦陸後津浪漸来民屋漂破溺死者兩／三人今正當七十一年今又然哉與否哉隣家互問河井水不乾窺海上潮不退而／津波俄来周章騷動難逃走家屋漂流溺死者大凡及三百八十余人運命尽期乎將／又前世之宿因所感乎今正當六十年天運循環無不往復願後人為令迺復轍之謹記体哉

\* 碑文は伊東市教育委員会 (2005) によった。



付図1 行蓮寺にある元禄地震の万霊塔

Fig.A1 Memorial tower of Gyorenn-ji Temple in Usami erected for the soul of victims due to the Genroku earthquake.

### (2) 仏現寺 (伊東)

#### 万霊塔(仁王門横, 図 13(c))

(正面)

妙法 三界萬靈

(左側面)

元禄十六年癸未年十一月廿二日夜丑時

地震津波

當所水難亡魂老少男女壹百参拾余人

#### 供養塔(仁王門横, 図 13(d))

(正面)

南無妙法蓮華經

下田家新五郎誌之

元禄十六年癸未十一月廿三

地震津浪當処照光院於テ

小田原死去當村水没之男

女百六十三人各靈菩提也



付図2 仏現寺の仁王門横にある元禄地震の万霊塔と供養塔

Fig.A2 Two memorial towers near the Nio-Gate of Butsugen-ji Temple in Ito erected for the soul of victims due to the Genroku earthquake.

#### 日蓮大菩薩五輪塔(毘沙門堂前)

(正面)

日蓮大菩薩

(裏面 地論)

豆洲賀茂郡伊東浦

海光山佛現寺

弘長元辛酉年三月十二日

御流罪靈地

(台座左面)



付図3 仏現寺の毘沙門堂の前にある元禄地震の犠牲者を弔う五輪塔

Fig.A3 Memorial tower in front of Bishamon-Hall of Butsugen-ji Temple in Ito erected for the soul of victims due to the Genroku earthquake.

寶塔造立之／志趣旨

先新左衛門／照光院了達／日然信士者  
依相州小田原／原城下公用／去元禄十六  
癸未然十一／月廿三日期

(台座裏面)

地震火難行／年四十歳而／死去於爰備  
一塔擬追福／菩提并悲母／秋月院妙行  
日達信女祈／滅罪生善者也

繼母／要玄院妙照日法

(台座右面)

干時

元文五庚申天／八月十三日



付図4 恵鏡院ある元禄地震の万霊塔

Fig.A4 Memorial tower of Ekyo-in Temple in Kawana erected for the soul of victims due to the Genroku earthquake.

願土和田村／下田新左衛門

法号／勇極院了精／日進

\* 碑文は伊東市教育委員会 (2005) によった.

### (3) 恵鏡院 (川奈)

万霊塔

(正面)

有縁無縁萬霊等

元禄十六年癸未十一月念二日夜

地震並津波村中死人数二百人除たび人まで

施主當村若キ衆中

\* 碑文は伊東市教育委員会 (2005) によった.